第３回　子どもと刃物①

「肥後守で鉛筆を削る小学校」

講師／鹿熊勤（ジャーナリスト／日本エコツーリズムセンター理事）

【かくま・つとむ】1960 年生まれ。アウトドアや農林水産業、地域活性、日本の伝統技術などの分野で取材を続けるジャーナリスト。野鍛冶を訪ね、地域の特徴的な刃物や技術を記録。訪ねた鍛冶屋は全都道府県計 150 軒を超える。近年は教育と文化の視点から刃物に関する提言を続ける。著書に『日本鍛冶紀行』『はたらく刃物』（ワールドフォトプレス刊）など。日本エコツーリズムセンター理事、立教大学・立教大学院兼任講師。

皆さんご苦労さまです。日本エコツーリズムセンターの鹿熊です。今日は 3 回目の「教育と刃物」ですが、第一部のクラフト「うぐいす笛づくり」では、さっそくケガ人が２人出ました。１人は少年でちょっとベソをかいていましたけれども、最後は「俺も一人前になったかな」という顔をして帰っていったので安心しました（笑）。子どもたちが刃物を使う機会が少なくなっている現在、指を切って自分の血を見ることさえ稀です。だから彼は、今日はちょっと痛い思いをしたけれど、とても貴重な経験をしたんじゃないかなと思います。安全に責任持つべき主催者がいうことではないのかもしれませんが、小さなケガの経験は、大きなケガの抑止になるはずです。

といいながら、私も先日、今日のうぐいす笛に使う材料の竹を切りに行ったとき、久しぶりにざっくりと指を切ってしまいました。刃物で切ったのではなくて竹の皮です。竹の表皮は非常に硬く切り口が鋭利なので、不用意に触れるとスパッと切れます。皮膚が切れるときの感覚って気持ち悪くて、血は少し遅れて出るんですよね。切り口の組織が見え、それから血がにじんでくる。ケガをすると痛いだけでなく不便なので気をつけているんですが、やっぱり人間って油断するんですよ。だけど、過去の経験の積み重ねがあるから、小さなケガで済んでいるのかなという気がしました。

今日は成人の参加者も一人指を切りました。あっ、そこにいらっしゃいますね（笑）。ずいぶん立派な負傷でしたね。ケガはしないに越したことはないけれど、でもやっぱり痛い思いをしておくという経験って大事だと思うんですよ。今日させていただくお話は、そういうことにもつながっています。30 年にわたり子どもたちに刃物を使わせている小学校の話です。

タイトルに肥後守と書いてありますが、読み方は「ひごのかみ」です。「ひごもり」とか「ひごまもり」って読んじゃう人もいますが、この正しい読み方を知っているのは、ある

程度の年代から上の男性か、ナイフ好きな人です。実物をここへ持ってきました。タイプとしてはフォールディングナイフ、いわゆる折りたたみ式の小刀です。ただ、ビクトリノクスのマルチツールなどとは違い、ロック機構がない素朴な構造です。いろんな類似品がありまして、大小さまざま、素材もさまざま、ノコギリのついたものもあります。

これは後ほど話に出てきますが、永尾さんという方が兵庫県の三木市でつくっているもので純正品です。いわゆるブランドとして正当な肥後守です。あとのものは、ちょっと由来が分からないブランドですね。商標的観点では類似品ということになるんでしょうか。前から回しますので、刃を出し入れしてもらったり、何か削ってもらっても結構でございます。

この写真にある鉛筆は、長野県の池田町立会染（あいぞめ）小学校の児童たちたちが、握れなくなるほど短くなるまで肥後守で削り続け、最後は継ぎ足しキャップにはめ込んで勉強に使ってきたものです。校内のイベントの際、これだけ僕たちは鉛筆を大事に使いました、肥後守をうまく使いましたということを見せるために展示したものです。この小学校では、入学するとＰＴＡから肥後守がひとりずつにプレゼントされます。学校に鉛筆削り器はなく、子どもたちはこの小刀で６年間鉛筆を削ります。学年ごと、あるいは個人によって上手下手はあるんですけれども、見せてもらった鉛筆には、ときどき「こいつすごくいい感じだな」というのがあります。いい感じとはどういうことかというと、迷いなく削っている。スパッと正しく切れているということです。指が慣れている感じがします。削った表面もツヤツヤしていますよ。毎日家や学校で刃物を使っていると、こういう指先になるんだなと感じがいたします。

そもそも肥後守とはなんぞやという話をしたいと思いますね。じつは第一部のクラフト指導をしていただいた関根秀樹さんは、肥後守の熱心な収集家です。詳しい方の前で解説をするのは気がひけるのですが、もともとは明治の終わりに兵庫県で生産が始まった、和洋折衷型の小刀です。欧米式ナイフの形を借りて日本向けに換骨奪胎した簡易型のナイフなんですね。地名をとって、最初は平田ナイフと言われていたそうなんですね。もともとのモデルは九州の熊本でつくられていたナイフだったという話があります。

三木は江戸時代から刃物の大産地で、受注にこたえる技術力や営業力があったことから、要するに熊本のお株を奪ってしまったんでしょう。どんどん生産を増やし、いろんな名前をつけて売っていくのですが、一番売れたのが、プロトタイプである熊本にちなんだ「肥

後守」という名前の平田ナイフでした。これは関根さんの分析でもあるのだけれど、肥後の象徴といえば加藤清正。勇猛果敢で知られた武将です。また、熊本には肥後の同田貫という名刀もありました。強くて切れるというイメージを託したのでしょうか『肥後守』と名付けたところ、その刻印の小刀ばかり売れたそうです。そこで肥後守だけでなく『肥後〇〇』とか『〇〇守』という名前がたくさん出て乱立状態になり、肥後守はこのタイプのナイフの一般名称として浸透していきます。

肥後守の位置づけは、子どもの遊び道具です。文献や周囲の証言を総合すると、昭和 40 年代ごろまでは、全国どこでも当たり前に使われていたようです。構造としては両刃です。つまり断面を見ると左右対称になる刃の形です。ロック機能がないので、チキリと呼ばれる根元の突起の部分を親指で押さえながら使います。さらに鞘が金属を U の字型に折り曲げた簡易型になっています。

もうひとつの特徴としては非常に価格が安い。子どもの小遣いで買えるものだったんですよね。今、会場にお回ししているシルバーの鞘のものは現在の値段で 700 円くらいです。子どものお小遣いでもなんとか買える刃物ということで人気があり、わんぱく少年たちはみんな持っていました。

左の写真をちょっと見ていただきたいのですが、これ長野県阿智村というところで終戦後先生をやっていた熊谷元一さんという方が、自分の教え子の姿を撮ったものです。木を削って卓球のラケットを作っているところです。この刃物、ナイフじゃないですよね。農具の鎌です。草刈り鎌を器用に使って遊び道具を手づくりしているわけです。じつは時代や地域によっては、肥後守さえも高嶺の花で買えなかった子どもたちもいて、そういう子は身のまわりにある刃物を遊び道具として使っていました。親の目を盗んで大工道具を引っ張り出してきたり、こういう刃のついた農具で遊び道具をつくるんですね。

でも、やっぱりいつかは自分のナイフが欲しくなります。私自身もそうでしたが、肥後守を持っているお兄ちゃんたちがうらやましくてしかたがない。高学年になるとお年玉をはたいて初めて買ったときのうれしさは今でも覚えています。

私が子どものころ、肥後守はいたるところで売られていました。雑貨屋さん、駄菓子屋さん、荒物屋さん、金物屋さん、釣具屋さんにもありました。もちろん模型屋さんやおもちゃ屋さんにもありました。文房具屋さんにも売っていたと思いますね、つまり、子どもが行くところにはみな肥後守があった。それぐらい一般的な存在でした。

先月の銃刀法をテーマにした回でも話が出ましたけれど、1960 年に浅沼稲次郎という社会党の委員長が、右翼の少年に刃物で刺殺される事件が起きたことをきっかけに、子どもたちに刃物を売らない、使わせないという運動が起こりました。私はちょうどその年に生まれましたが、肥後守は小学生くらいの間まではどこでも見かけたと記憶します。つまり 70 年代までは子どもたちに使われていた。凄惨な事件があって「持たせない・売らない」運動が全国的に起こった一方、地方ではそこそこ売られていました。危険玩具に対する認識はそんなもので、学校で禁止されているＢＢ弾のような爆竹や、すでに禁止猟具になっ

ていたカスミ網もお店に行けば買うことができました。建前は建前としてあったわけですが、子どもが刃物持っていても、別に大したことないんじゃないかというおおらかな空気も社会の一部にはあったように思います。

逆にいま、街を見ていて感じるのは、子どもがたむろする店がないということです。それに、子どもに関することに対してすぐ目くじらを立てますよね。子どもに声をかけただけで変質者扱いされてしまう。過保護というか、意識過剰といいますか。子どもの世界、とくに放課後が窮屈になっている気がします。駄菓子屋もほとんど見ませんし、釣具屋さんも淘汰され大型店か専門性の高いプロショップになっている。模型店も激減し、模型もほぼすべてプラスチック製です。刃物を使って完成させる木とか紙の飛行機や凧もありません。凧揚げしている子も見ない。じゃあ子どもたちは何をして遊んでいるのか。ゲームやインターンネットですね。昔はテレビと言われましたが、テレビも今やオールドメディアです。

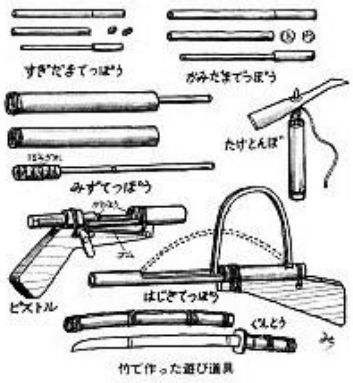
昔は道草という言葉がありました。寄り道のことですね。いまは事件や事故から子どもたちを守るために集団で登下校するので、そういう光景もなくなってしまいました。思えば昔の放課後というのは黄金の時間でしたね。特に田舎は、帰り道の途中に川があったり山があって、遊ぶもの、食べるものに困りませんでした。大人の目を盗んで火を川原で起こして、芋を盗んできて焼いて食べるとか、突いた魚を焼くとか。刃物があるとそういう遊びは便利でより楽しくなるので、ポケットにはナイフとマッチが入っていました。

パチンコの作り方

こまの作り方

いまそんなものを小学生が持っているとちょっとした騒ぎになりますが、昔は当たり前のことでした。当然学校の宿題の工作だとか鉛筆を削るのも刃物でした。さきほどの鎌でラケットを削る少年のような姿が、人間としての子どもの本来の姿なのではないでしょうか。なければ工夫をする。これは石器時代から変わらない人間の基本行動だと思います。

スライドの右側は、戦前の子どもたちの思い出を描いた本（竹内途夫『尋常小学校物語』福武書店刊）の一部なんですけれど、見ていただくとわかるのですが、ひとつとして買った遊具がないんですよね。自分でつくる。独楽（こま）を作る上の絵を見てください。やっぱり鎌で削っていますよ。それからパチンコという小鳥を撃つような道具も自作で、木の枝の又の部分を切ってきてつくる。買うのはゴムくらいです。



竹で作った遊び道具

水鉄砲とか、竹とんぼのような高度な遊び道具も、子どもたちは自分で刃物１本でつくり、それが「遊ぶ」ということだったわけです。

私の世代までは、子ども時代にチャンバラごっこという遊びがありました。時代劇ごっこです。生の手ごろな木の枝があると、それを切って皮を削るんですね。刀のように模様をつけたりして、それで打ち合ったり斬り合いの真似事をするんですが、かっこいい刀に削るにはナイフが必要なんですよね。いかに模様を美しくすてきに彫るかという、そういうところに面白さを感じていた。チャンバラごっこというのは、勝ち負けじゃなく、目的の半分ぐらいはかっこいい刀をつくることだったように思います。当時よくあった笑い話が、ウルシの木を削っちゃって、かぶれて顔がパンパンに腫れ、体じゅう痒くてえらい目にあった話。でも、そういう経験から樹木の種類や特徴も覚えていきました。魚遊びにも刃物は欠かせません。釣りの道具をつくったり、仕掛けの糸を切るときに欠かせない装備品でした。

最近意外なことを知ったのですが、ある年代の人たちは、子どものころに使った肥後守を実用品として今も使っているんですよ。じつは私の家内の父親なんです。80 歳を過ぎているんですけれど、田植えを手伝いに行ったとき、ポケットに入れていたのでちょっとびっくりしました。今、田植えはほぼ全自動化された乗用機械で行ないます。苗を植えるだけでなくで、肥料や薬剤も同時に散布してくれます。しかし、補給は人がしなければいけない。肥料や薬剤は厚いビニール袋に入っていて、それはいちいち切らなければいけないんです。肥後守はそのビニール袋を開封するときに使うんです。

「おっ、肥後守じゃないの」って言ったら、「ずっと使ってるよって」と。これは近所の食材関係の方から聞いた話ですが、青果市場には、野菜や果物のダンボールを開封するときに肥後守を使っている人たちもいるそうです。カッターナイフの人もいるけれど、割と古い人は肥後守をポケットに入れていて、これでダンボールの境目のテープをバッと切る。そんなに凄い切れ味ではないんですよ、肥後守は。今はノスタルジー需要で高級鋼材を使った値の張る肥後守もつくられていますが、昔の肥後守は子ども向けだったので鋼材のグレードもそれなりで、飛び切りよく切れたわけではなかった。でも、こまめに研げばそこそこ切れたし、ほとんどの作業には十分。肥料袋や段ボールに貼ったテープを切るぐらいのことはわけもないことです。あえて今の時代に肥後守を使い続けるのは、手に馴染んでいる、愛着があるということでしょうか。

肥後守はものすごいブームというわけではないのですが、結構リバイバル的な人気があって、コレクターがいます。あるいは昔遊んだ世代向けに、いま言いましたように大人向けの高級バージョンもたくさん出ています。会場に回しました真鍮の鞘のものがそうで、1万円前後するものもあります。海外でも人気があります。

こんな海外からの評価もあります。

「武器でも、戦術目的のナイフでもない。普通のツールとしてのナイフの純粋な形だね」

これ、日本人としてはうれしいですね。肥後守はまさにツールとしてのナイフなんです。

「値段のわりにいいね。YOU も買っちゃいなよ」「どうやって使うんだ？」「親指で押さえるんだよ」
　私なんかは、わがことのようにうれしいですね、こういう評価は。

　先ほどお話しした浅沼事件ですが、犯人の少年は犯行時に学生服を着ていました。これが刃物追放運動というものを大きなうねりにした要因のひとつだったのではないかと私は思っています。ただ、事件が起きて規制が厳しくなったから刃物離れが起こったのかというと、それだけではない気がしているんですね。事件が起こる→子どもに持たせないようにする・抑圧する→使われなくなる…これもひとつの理由でしょうが、どうもそれだけではない気がしてならない。なぜかというと、文具の歴史とか世相史を見ると、別な要素も見えてくるんですよ。
　鉛筆というのは 1575 年くらいに登場したそうです。はじめは天然の黒鉛を木の板で挟んだ簡素なものでした。16 世紀には日本にも渡来していて、じつは徳川家康や伊達政宗も手にしていたそうです。鉛筆の弱点は自分で削らないといけないことなんですよね。安くて誰でも使いやすいのですが、削らないといけない。日本で普及したのは明治時代。1887 年に三菱鉛筆がはじめて国産化しました。学校教育とともに普及したと考えていいと思いますね。寺子屋時代は毛筆です。国民皆教育を推進した立役者は、筆に比べるとはるかに扱いやすい鉛筆だったといえると思います。肥後守の生産は、それからまもなく始まります。
　シャープペンシルも意外と誕生が早く、1822 年くらいには登場しているんですね。日本でもシャープペンシルの研究は早くて、繰り出し式鉛筆の名でデビューしました。最初の国産メーカーは今の家電会社のシャープです。
　鉛筆削り器も、手回し式のものは 1920 年代には出ていました。ただ、一般の人には買えるものではなかったので、まだまだ鉛筆削りの主流は小刀です。手動式の鉛筆削り器が普及した後、昭和 30 年に入って電動式というものが出てきます。差し込むと自動的にガーっと削れちゃうやつですね。普及したのはちょうど私たちが小学生のころです。便利というよりも面白いので、つい遊んで削ってしまう。するとあっという間に鉛筆が短くなります。子ども心にも、これはもったいないなと思っていました。横着な時代の始まりです。
　カッターナイフは 1956 年に出ています。オルファカッター。折る刃というのでオルファという社名なんですよね。カッターナイフの特徴は研がなくてよいということです。板チョコのように同じ形で折れるようになっていて、切れが鈍ったら刃を順番に折ってリフレッシュすればいい。カッターはつまり使い捨てのナイフです。
　ボンナイフというのを聞いたことありますか？　かみそりの刃にホルダーが付いていて、それで鉛筆を削ります。そもそもなぜ刃物を子どもたちに持たせると危ないのか。それは先が尖っているからだろう。鉛筆を削るのにやっぱり刃物は必要だから、先の尖っていないものならよいだろうと、刃物追放運動以降につくられたのがボンナイフです。
　でも、子どもの世界の趨勢はシャープペンシルになっていきました。私の小学校高学年

のころには安いシャープペンが出ていて、みんないっせいに鉛筆から乗り換えたのを覚えています。みなさんはどうでしたか。今も小学校に入学するときは鉛筆を贈るんですけれど、ほとんど儀式化していて、３年生にもなると特に女の子なんかはおしゃれな文房具を選んで鉛筆は使わなくなるし、ランドセルも使わなくなってきますよね。メインテナンスフリーのシャープペンシルが安く買いやすくなったことが、鉛筆を使わなくなったもうひとつの要因のような気がしますね。

さらに 90 年代に入ると、メモは電子手帳になり、現代ではタブレットやスマホに変わっています。筆記すらしない流れになりました。こういう社会の移り変わりを見ると、必ずしも凶悪事件が刃物を駆逐してきたという軸だけでは分析できない気がするんです。『三丁目の夕日』という映画がありましたよね。高度経済成長期、少年少女が中学を卒業後、田舎から列車に乗って集団就職しました。金の卵と言われ、東京の中小企業の労働力になるわけですけれど、すぐ即戦力になれたのは鎌でラケットを削って遊んでいたような下地があったからだと思うんですよ。今の標準的な中学生を町工場に連れて行って、どれだけ使えるかというと微妙ですよね。相当な指先トレーニングが必要になると思うんです。

いま偉そうに言っている私だって、テレビ世代でだんだん外で遊ばなくなってきたクラスターの一員です。ちょうど子どものころ問題になったのが『仮面ライダースナック』でした。スナック菓子のおまけにカードが付くんですけれど、このカード欲しさにスナックをいっぱい買って、食べないで捨てるという問題が起きました。本末転倒というか、罰当たりといいますか。でも、今もありますよね。プロ野球カードとか、おまけの方の価値のほうがクローズアップされている商品が。端的にいうと、これが高度経済成長以降の日本の姿の象徴なんです。欲しいものは買えばいい。いらないものは捨てればいい。それが豊かさだと。

話はまた会染小学校に戻りますが、あの学校が肥後守を子どもたちに使わせる選択をしたのは、そうした高度経済成長が生んだ歪（ひずみ）を是正するためでした。始めたのは当時校長先生だった二村汎（にむらひろし）さんです。1983 年のことです。どういう思いで始めたのかということを、このセミナーのために直接長野県にお住いのご本人から聞いてきましたので、ダイジェストでお話ししたいと思います。

二村先生は大正 14 年生まれです。今年で米寿。私の親の世代ですね。この方が教師になる前に受けた戦前の教育の世界では「手は第二の脳である」ということが盛んに言われていたそうです。ゲシ

ュタルト心理学というのがあるそうです。どんなものかわからないので調べてみたら、人間の精神を部分や要素で見るのでなく、全体的、体系的にとらえようという形の心理学だとか。そのゲシュタルト心理学の中には、体は連動し合っているという視点があります。その中心的な論が「手は第二の脳である」です。手を使うことで脳は発達する。脳と手はつながっているので、指先を使うことは子どもの成長の面でもとても大切だということが、じつは戦前から心理学や教育学の世界では指摘されていたそうです。

二村先生が教師になった終戦すぐはひもじい時代で、子どもも重要な労働力でした。家の中でいろいろなことをやらないといけない。手伝いというより、率先してできる仕事をしなければいけなかった。たとえばかまどで火を焚く。それで自分で飯を炊き、弁当も自分でつくってもっていけと言われたくらい、子ども自身が何でもしなきゃいけない時代だったということですね。

それから世の中が大きく変わっていきました。最近の子はおかしいなとは思いつつ、なんとなく日常業務に追われ続けてきたけれど、自分が教頭・校長になるころ…昭和 50 年代くらいになって「今の子たちの動きはおかしい、これは深刻だ」と思うようになったそうです。第二の脳である手を動かせない、上手に使えなくなっている。脳の発達を考えるうえで大きな問題ではないかと感じたそうです。

そのころ、会染小学校は木造校舎で、窓のカギは手回し式でした。平べったいネジで開け閉めするのですが、木製の戸と戸の間には伸縮調整用の遊び、つまり隙間があいているので、とくに締めるときはコツがいります。ぎゅっと押して向こうの鍵穴を感覚で探り、ぐいっとねじ込まないといけない。それができない子どもが増えてきた。ずっとカラカラカラカラまわし続けて、いつまでもカギが締まらない。これは何だろうと。

靴紐がほどけていても無頓着で、自分で自分の紐を踏んで転び、はじめて事の重大さがわかる。しかも受け身というか、転び方がへたなので結構大きなケガをする。つまりなんだろうな、動物的な勘ですよね。転んだり、転ばないようにするにはどうするかとか。このへんは、来月ご登場いただく冒険遊び場づくり協会の天野さんからお話が出ると思うのですが。

二村先生は、どうも最近の子は指が音痴になっていることに気付いたとおっしゃいます。第二の脳どころか、指の感覚が調子っぱずれになしになっているというのです。もうひとつ目につくようになった現象として、雑巾が絞れない子が増えてきた。木造校舎なのでまだ手拭きの掃除なんですね。当時新しい校舎はもうモップがけになっていました。雑巾が絞れないということはどういうことかというと、右と左を逆方向にねじるということを知らない、できない。二村先生はうんこづかみと言っていましたが、つまり両手でわしづかみにして絞ろうとする。力が入らないから水が垂れてしまう。家で拭き掃除をしない、やる機会がなくなっていることに気づきます。

もうひとつ、この 80 年代には子どもたちの健康にある変化が出始めます。なにか。椎間板ヘルニアが増えだしたのだそうです。原因は掃除のやり方にもあって、ちゃんと腰をお

ろして拭かないので、椎間板に負担のかかる姿勢になってしまうんです。昔は立ち振る舞いにもうるさくて、机は引きずっちゃだめだってよく怒られましたよね。ちゃんと腰を入れて持ち上げろと。それを言わなくなったので、ずるずると押す。行儀が悪いだけでなく腰が中途半端に曲がりますよね、モップがけのときも。私も椎間板ヘルニアをやっているのでよくわかるんですけれども、腰の入っていない姿勢って腰にはとても危ないんですよ。当時子どもの椎間板ヘルニアは、モップがけのような楽な掃除の方法を取り入れた学校に多かったそうです。

まだまだ兆候はあります。たとえばシャツのボタンが閉められない、着衣がジャージになってきていますよね。ファスナーでビューっと上げる。先ほどの靴紐が結べないという話も、紐でなくベルクロ止めになっていることが背景にあります。結ぶ必要がなくなっているから結べなくなるわけですね。

じつはそういう新しい商品というのは常にまぶしい存在なので、子どもは欲しがるわけですよ。親は買ってあげないと周りから置いていかれるのではないか、仲間外れにされてさみしい思いをするのではないかという不安があって、つい買い与えてしまう。そういう例をいろいろ見てきたそうなんですね。

校長になるということは、定年に近づくということです。教育者としてなにか結果を残さなければならない。いわば総仕上げの方法を考えたとき、二村先生はこの手の問題、手が音痴になっていることに向き合おうと考えたそうです。そこで取り組んだのが、子どもたちに刃物を使わせることでした。

きっかけがもうひとつあるそうです。二村先生が校長として赴任する前、学校の子どもが亡くなっているんですね。下校時だと思うんですけれど、慌てて走り出ていって車にひかれたらしい。走って飛び出すというのは子どもの衝動でもあるけれど、立ち振る舞いなどにも遠因があるのではないかということで、下駄箱にきちんとかかとをそろえて靴を入れさせるということから指導を始めたそうなんですね。そういうことを実行していく中で、昔ながらの躾や、暮らしの技術の中にいろんなヒントがあることに気付いたんです。

鉛筆を削るという視点に至ったのは、立ち振る舞いに近いのですが、次のようなことにも関係がありました。子どもが家で鉛筆を削ってきても、学校へ来たときには芯が折れている。子どもですから走ったり跳ねたりもする。鉛筆はガタガタと筆箱の中で揺れます。昔はキャップをかぶせるとか、筆箱の間にちり紙を詰めるなど、芯が折れないための配慮や工夫をしていたのに、それすらもしなくなっている。学校に鉛筆削りがあるから、折れてもまた削ればいいやということなんです。でもそれでは二度手間というか、鉛筆が無駄になってしまう。もったいない、ありがたいということも子どもたちにしっかり教えるにはどうすればいいか。昔のように小刀で鉛筆を削らせればいいんじゃないかと思ったそうです。

「なかなか合意形成が難しかったのでは？」と聞いてみると、確かにそうだというんですね。教頭のころから思っていたことは「近ごろ子どもに対する苦情が多い」ということで

した。子どもが起こした問題の責任を、地域も家庭もみんな学校に問う風潮が広がったというのです。たとえばピンポンダッシュってあるじゃないですか。通学路の家のチャイムを鳴らして逃げて走るいたずらです。それがあるとすぐ学校に「躾がなってない」と電話がある。二村先生は田舎の昔のお父さんがそのまま先生になったような方で、そういう苦情があるとけっこう本音で話をするんですね、教師という立場を超え人間として。最初に「それは申し訳なかった」と謝るそうです。そしてこう続けます。「たしかに躾がなっていない、指導が足りないというのは我々の責任なんですけれど、今度そういう光景を見たら叱ってやってくれよ。学校でも注意するけど、あなたも社会の一員として悪いことをしてはいけないんだと諭してくれ。昔はそうだったじゃないか。大人は、よその子どもでも悪さをすりゃ叱っただよね。私は今でこそ教師でございって顔をしているだけれども、子どもの頃は同じような事をしていた。人の家の柿を盗んだり、道の芝草の端と端を結んでおいて、向こうから肥桶を担いできたおじさんが来て引っかかって転んだのを見て手を叩いて笑ったり。そのかわり、どの家の柿がおいしいか全部知っていた。そういう悪さをしてでっかくなって、今なんの巡り合わせか教師をしています。昔は迷惑もかけたけれど、帰り道は楽しかったよね。今は見てやってください。集団登下校で道草も食えないような世の中の流れのなかで、ピンポンダッシュくらいしかないんですよ、子どもたちの道草は。それ自体はいいことじゃないけれど、子どもっていうのはもともとそういうものなんだから、見たらあんたも遠慮なく叱ってくれ」ということを、同じ住民として訥々と訴えたそうです。

そう話すと「そういう教頭さんならよかったね。わしらも見つけたら怒るようにするよ」と理解してくれたそうです。肥後守で鉛筆を削らせることについても、もちろんいきなり明日から子どもたちに刃物を持たせますというのは無理で、準備が必要です。まずは保護者でなく教員に思いを伝えたそうです。私は教育の世界のことはよく分からないのですが、二村先生によると、校長といえども上位下達式のことはできないそうなんですね、やはり個々の先生の自主性を尊重しなければいけない。自分の考えを伝えつつ、教務会や学年主任会にかけてもらって下地をつくった。いわゆる根回しです。

でもやっぱり、反対の声が漏れてくる。「そんなことをしていいのか」「何か問題が起きたらどう責任を取るのか」と。でも根気よく意義を伝えて納得してもらい、今度はＰＴＡに諮った。ＰＴＡの役員会にかけると、あんのじょう反対意見が出てくる。

それをどう納得させたか。アイスブレイクじゃないですけれど、まず本題は置いておいて、ナイフとは関係のない話を最初にしたそうです。「家の中で最近子どもについて気づくことありませんか？」。そうすると 80 年代当時、子どもを持つ親というのは団塊の世代なんですけれど、「最近の子は果物の皮がむけない」とか「靴紐が結べない」といったぼやきが出てくる。うちもそうだ、こういう光景を見た…というふうに、しばらく「最近の子どもたちは」という話題で盛り上がるそうです。それを見計らって、鉛筆の芯が折れた状態で登校する子が増えている話をし、刃物でその都度削れば経済的だし手のトレーニングに

なると水を向けたそうです。

同時に、これは殺し文句なのかもしれないですが、「学校でひとりにひとつずつプレゼントするからもらってくれるかい。嫌なら使ってくれなくてもいいんだけれど」と提案したところ、合意が取れたそうです。そのあたりのファシリテーション能力というか、人間として、教師対親という関係を超えてちゃんと相手の懐に入っていけるのが二村先生なんです。信州の方言丸出しの先生なんですよね。飾らず構えず、自然体で語りかけることができたから可能になったんだと思いました。

もちろん、反対する声は最後まで聞こえたそうです。「やっぱりそれは危ない。理屈じゃ大事だということはわかるけれど、昔は浅沼事件なんかもあったし、何か刃物で問題が起きたらどうするんだ」と。二村先生は「そのときは、こんな短い首ですが私の首をかけますよ」とはっきり言ったそうです。子どもたちにも朝礼で語りかけました。「鉛筆を削るためのナイフで悪ふざけをして、もし友だちを傷つけてしまうようなことが起こった時は、校長先生は学校をやめなくてはいけません。ナイフというのは危ないものですが、でもあえて皆さんには使ってほしい。皆さんの将来にとって、大事なことだからです」と。

高校生にバイクを乗らせるべきかどうかという議論にも似ているとおっしゃっていました。いいじゃないか、行動が広がるし通学が楽になるという人もいるし、絶対にだめだ、何かあったらダメだというのとおんなじで、地域の中で、家庭の中で、いろんな考えがぶつかるテーマだそうです。

私は二村先生に聞いたんですね。「もしこれが都会だったら、同様な合意形成はできるでしょうか？」と。答えは「わからない」。やはり地域の雰囲気によるし、いい地区に赴任できたからだとおっしゃっていました。いまの学校と地域・保護者の関係は、メーカーと消費者みたいな関係になってしまっていて、先生たちが苦情処理みたいことに振り回されている。地域や家庭が自分たちの役割を忘れ、なんでも学校に問題を持ち込んでくることも、デリケートなことは避けようという空気を作り出している原因ではないかと思います。

では、実際に会染小学校ではどんなふうに肥後守を使っているのかをスライドで見てもらいたいと思います。

これ、子どもたちが使っている肥後守です。使っている感がありますよね。毎日使っているから研ぎ減っています。この渋い輝きはどうですか、職人さんの道具みたいでしょう。これが働いている刃物の貫禄です。鉛筆は、短くなったら継ぎ足しキャップをつけて大事に使って

います。プーマブランドのバッグに肥後守が入っているっていうのはいい絵だなと思って撮らせてもらったんですが。今から 5 年前、もう平成に入って 20 年になったときなんですけれど、昭和の子どもたちを見たような気がしました。

この子は、今もう高校生だと思うんですが、当時 6 年生。どんなふうに削るのか見せてもらったのですが、6 年間やっているので指が板についているというか、右と左の呼吸が合っているというか、見事な指さばきです。二村先生も言っていたのですが、人間の手というのは左右対称なんですけれど、作業するときは違うですね、役割が。右手と左手はそれぞれ役割があって、違う動作をしながら協力し合っている。そうしないとナイフは切れないんです。

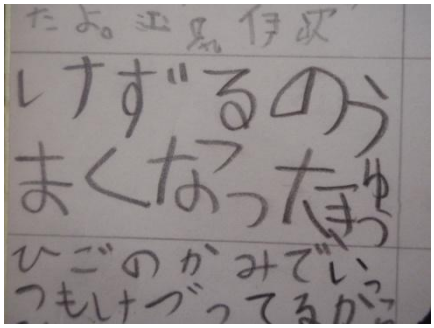
さきほどの第一部でナイフ使って削った時にみなさん感じたと思うのですが、右手だけで削ったらすごく危ないんですよ、不安定で。左手でおさえたり、調子をとっていくことでバランスよく安全に削れるんですよね。

基本的に、刃物は片手では使えません。それは鉛筆削りが一番分かりやすい。みんな無意識にやっているので意外に思われるんですが、左手が大事なんです。左手をどう動かすか。じつは鉛筆は左手で削ってると言ってもいいんですよね。これって理屈じゃないんですよ。手で覚えていく事なんで。会染小の子らは、その意味ではみんな完璧でした。

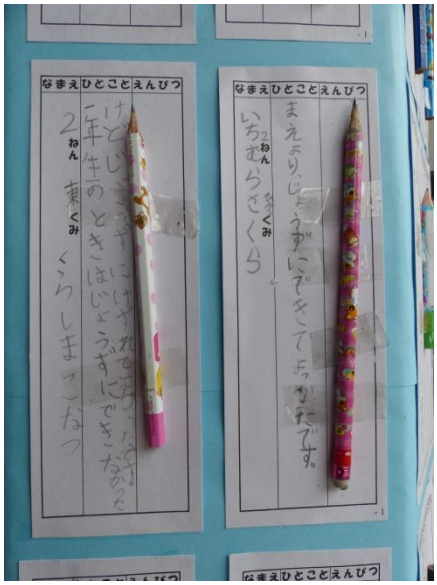
切れが落ちてきたら砥石で自分で研ぎます。学校の手洗い場には手入れや研ぎ方の基本について解説した紙が貼ってあって、自分のいない方向に刃を向けて押しましょうとか、裏表同じ回数で研ぎましょうとか書いてあります。そしてこの学校には、鉛筆削り器というものがありません。電動にしろ手動にしろ。全部ひとりひとりが持っている肥後守で削ります。「カシメ」についても解説があります。カシメというのは開閉の軸になるリベットのところで、長く使っていると緩むんですね。緩んだ時の直し方等が書いてあります。カシメを調整するための道具まで置いてあるんです、学校に。すごいですよね。小学校ですよ。みんながち

ょくちょく使うので、砥石もすり減っています。なんだか、職人さんの現場に来たみたいに思えましたね。

先ほどもお話ししましたように、肥後守は小学校入学する時に全員にプレゼントされます。使うかどうかは任意ですけれど、学校の方針としては、これを使ってみんなで削りましょうということになっています。最初どういう形で費用を捻出したかは聞き漏らしましたが、途中からはＰＴＡが資源回収をして、段ボールや空き缶集めて得たお金で購入しているそうです。保護者からプレゼントされるという形ですね。



１年生はまだ幼いですから、家庭で親御さんに一緒に削ってもらう。学校では６年生が１年生の面倒をみるようにしています。５月くらいに指導月間があり、年に２回、刃物を使う強化月間のようなものを設定して、刃物でものをつくる、鉛筆を削ることの意義や技術向上に取り組んでおられました。



二村先生はずいぶん前に定年されましたが、肥後守で鉛筆を削る取り組みは会染小学校の伝統になっていて、今年はちょうど 30 周年なんです。二村先生のところに行ったとき、学校からこういう展示物を借りてきて見せてくれました。今年の展示だそうです。「２年生でもきれいに削れました」とか「丁寧に削れて嬉しい」とかワンコメント。２年生でこれくらいの削りが出来るんですよね。もう充分なものですよね。

学校では、肥後守を作っている職人さんを過去２回招いています。私たちが取材に行ったのもたまたまそのときで、２５周年の節目でした。この方が肥後守を作っている永尾元佑さんです。もう 80 歳近いかな。肥後守の商標を持っているのは兵庫県三木市の組合で、永尾さんはその三木で肥後守を作っている唯一の方です。この方は肥後守というナイフの消長を見てきた時代の生き証人でもあります。「一番つらかった時期はいつですか？」と聞くと「それはやっぱり刃物追放運動の時だったね。ちょうど俺が職人として独り立ちして嫁さんもらった時。子どもに肥後守を持たせちゃいけないということで注文が減って大変だった」とおっしゃっていました。「でも、いまだに肥後守で鉛筆を削ってくれて、こうやって記念式典までやって

くれて感無量だ。仕事を続けてよかった。今までの人生で一番うれしい」とおっしゃり、涙ぐんでおられたのが印象的でした。

面白いなと思ったのは、会染小の子どもたちにとって、肥後守をつくっている永尾さんってスーパースター並みなんですね。大尊敬している。オバマ大統領の就任のちょっと後だったんですが、歓迎会ではまさにそんな雰囲気だったですよ。「あっ、永尾さんだ！」みたいな感じで子どもたちが駆け寄って、もみくちゃになっていました。この方が、私たちが毎日鉛筆を削っている肥後守をつくっている永尾さんですと紹介されて、もう泣きそうになって嬉しそうでしょ。本当にすごくいい感じの式典でしたね。

最初に言いましたように、肥後守って両刃なんですよね。両刃の刃物というのは、片刃の切り出し小刀なんかに比べると鈍角です。鉛筆を切り出し小刀で削るときは、スーッと撫でるようにするだけで木に入ってくれるんですけれど、蛤刃とも呼ばれる両刃は、少しえぐる感じで切り込まないと入っていかないんですよ。特に安い鋼材を使った子ども用の肥後守は、グリッとえぐらないと削れないんだけど、会染小の子どもたちはその感覚を体でよくつかんでいます。右から６本目の青い鉛筆の子なんかは、ぐっとえぐって削っています。切れないなりに一所懸命特性をつかんで向き合っているなと感じました。その左の青い鉛筆の子の大胆な削りも、私は好きですね。迷いなくスパッと削っているっていうのは毎日削っている証拠のような気がしますよね。真ん中の黒いＭＯＮＯの子の削り方も、見ていてうれしくなるほど力強いです。

毎日使っていると、子どもたちも上達を実感するようです。30 周年用のメッセージには「肥後守は電気を使う鉛筆削りと違って、自分が芯を出したいだけだせるのですごいです」とか、これはちょっと優等性っぽい意見だけれど「エコに通じる」なんて書いてある（笑）。子どもたち自身が刃物で何かをつくる、鉛筆を削るということを楽しんでいる感じがします。

記念式典では寸劇もありました。肥後守で鉛筆を削ろう！　というダンス。こういう創作ダンスを自分たちで考えてやるんですよね。かわいいですね。歌もあります。肥後守で鉛筆を削ろう、みたいな（笑）。この 25 周年の

時は、永尾さんのオブザーバーとして三木市の市長さんが来ていました。三木市の市長、マイ肥後守を持っているんですよ。黒鞘の。こういうことって大事だなと思いますね。刃物づくりが地場産業ということもあり、三木市は手づくり工作教室を開いたり、パンフレットを作成したりと、盛り上げようとしているんですよね。でもなかなか全国的な運動につながらないのは、やはり半世紀に及ぶ刃物をタブー視する呪縛のせいかもしれません。

話は再び二村先生に戻ります。刃物教育が代々の校長先生、そして校区の人たちに受け継がれ、今や 30 年続く伝統行事になっている。その成果はどのような形として実っていると思いますか？　と聞いてみました。

それをはかることはできない。とくに進学率が上がったとも聞いてはいないし、よその学校の卒業生より偉くなった子が多いという話もない。だけど確実に言えるのは、家のお手伝いを率先してやるようになったとか、世間一般の同世代よりは手先が器用であること、ということ。そういうことをおっしゃいました。

私が取材に行った時、何人かの保護者に聞いてみたなかで印象的だった言葉が「なんでも安心してさせられる」ということでした。何が危ないかがわかっているから、家の中のたいがいのことは任せられるというのです。二村先生はこうも言います。「料理をよくつくってくれるようになったとか、柿の実の皮を１m20 ㎝むいたとか、そういうことは成果として測定不可能な要素だけれど、決して教育上マイナスにはなっていないと。子どもたちが肥後守から学んだことは「本来の子どもが身につけておくべき基本」。そのこと自体が、いまの日本では貴重なことなのだろうなとおっしゃっています。人間として到達しておくべき指先の水準は、この会染小学校の子どもたちに関してはクリアしている自信があると。続けてよかったという声も、あちこちから聞いているそうです。

先生も高齢になられて、このインタビューの後すぐに施設へ入られました。そのことについておっしゃっていたことも印象的でした。

「手が使えなくなるというのはとても問題で、高齢者施設でやっているトレーニングの基本はボタンの開け閉めなんだよ。右手と左手の違う作業をどう一緒にやるかという機能が衰えることのひとつが高齢化なんです。ですから施設では、右手と左手でじゃんけんをさせたりそれを一所懸命やらせたりしている。右左の指の機能の違いをもう一度認識させるのが老化防止の手段になっているぐらいだから、子どものうちから指を錆びつかせてしまってはダメなんだよ」

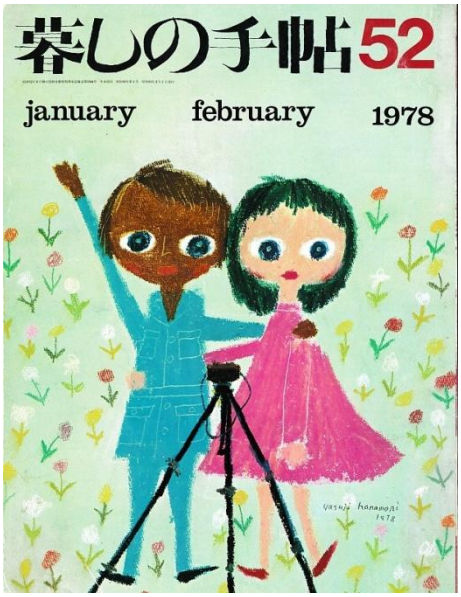
肥後守教育は、30 年続く校区の伝統ではありますが、近年は家庭によって意識に温度差もあるそうです。表立っては出てこない話だけれど、みんながみんな鉛筆削りを使わないわけではないらしい。そういう傾向が出てくるのは、私はむしろ当たり前だと思っています。私も３人子どもを育てましたが、親の気質は時代ごとに変わるように感じます。上の子のときと、真ん中の子のときと、下の子のときとでは、同級生のお父さんお母さんの年齢が少しずつ変わるし、気質もなんとなく変わります。今、小学生を持つ親御さんは、私の子ども世代ぐらいなので価値観もずいぶん違うはずです。会染小学校のような取り組みを広げていくことは教育のひとつの理想ですが、実際にはレアなケースであり、学校と保護者の考え方が一致ない限りは広がってはいかない。子どものうちから刃物を使わせることはとても大事なことだけれど、今後も広がりを期待できないのであれば、別なアクションも必要なのではないかと思っています。

地域や学校だけでなく、社会の中にも体験の場が必要です。二村先生がおっしゃっていたことでもうひとつ印象的だったのは、この問題は分業化の宿命なのではないかということでした。ものごとを全部分業化し、時間をお金に換え、暮らしを経済の中へ丸投げにしてきたことの弊害のひとつで、いちばん問題なのは、社会自体がそのことを問題だと思っていないことだとおっしゃっていました。

2008 年の朝日新聞に、心理学者の河合隼雄さんが面白いエピソードを書いています。ちょうど秋葉原通り魔事件のあとで、新聞の読書欄で刃物を使うことの是非が論じられたいたときです。むかし、カッパ先生というあだ名の先生がいた。生徒が小刀で机に落書きを彫り込んでいるのを見つけたが、カッパ先生は怒るどころか「お前の小刀の切れ味は相当なものだよ。一緒に木版彫りをやらないか」と褒め、彫刻刀をそろえて放課後に木彫をしたと。刃物をいたずらに罪悪視してはいけないという意味でしょう。

当時の投書欄には「刃物の使い方を学校で教えて」という意見がいっぱい来たようです。一方で「学校になんでも求めないでほしい」という先生方の反論もきた。カッパ先生の話は、その論争を受けたエピソードです。教育とはなにかということで、河合さんは会染小学校の肥後守教育についても触れています。

肥後守に関連して、もうひとつ興味深い資料があるのでご紹介します。『暮しの手帖』という雑誌は聞いたことある方も多いと思います。花森安治さんという方が創刊して、大変な信頼を勝ち得てきた生活誌ですね。広告を入れないんですよ。つまり販売収入だけで出し続けるということです。それはどういうことかというと、誰にも阿（おもね）ず、自分たちの書きたい事、正しいと信じたことを書きたいから。有名なのが誌上商品テストです。消費生活センターがやっていたような事を先取りしてやってきたんですよね。



日本人、いや人間にとって大事な視点は何かという哲学で突き進んできた雑誌です。この 1978 年の号で、花森さんは「人間の手について」というエッセーを書いています。簡単にあらすじを説明しますと、全国の 13 の小学校を訪ね、取材していろんなことを聞いて歩くんですね。お宅の学校にはどんな備品がありますか？　それは生徒何人に対してどれくらいの数ですか？　たとえばボールの数。オルガンの数。ＯＨＰ、つまりオーバーヘッドプロジェクター…今のパワポの前段階の投影機器ですね。あとは鉛筆削りはどうしていますかと。その調査によると、1978 年時点で鉛筆削り器を置いていない、つまり小刀で鉛筆を削らせていたのは 13 校のうち１校だけだったそうです。12 校のうち８校までは電動式の鉛筆削り器で、ナイフを学校に持ってくること自体を禁止しているところが４校ありました。彼はこう書いています。

「1960 年に社会党の委員長が少年に刺殺された事件がありました。その後警視庁はすぐに刃物を持たない運動を始め、学校にはナイフで鉛筆を削らせないように、鉛筆削り器を使うように連絡指導事項として強く要請したのです」

昔の人ですからよく知っていますよね、浅沼事件当時の事を。私なんかは生まれた年ですから、ライブでは当時のムードを知らない。花森安治さんは一連の動きを直に見てきたから記憶が鮮明なのですね。

「これは戦後警視庁のやったおせっかいの中でもっともまずかったことのひとつです。今は警視庁自身でもなにぶん古い事で詳しいことはよくわからないなどといっています」

警視庁にもちゃんと取材をかけているんですが、トボケられてしまう。古い話で記録も残っていないと。その先がちょっと興味深いのです。

「それなのに学校によっていまだにナイフを持つのをはっきり規則として禁止している学校があるのですから、お上からの通達というよりは、もっと別の理由があると考えた方がよさそうです」

子どもたちが小刀で鉛筆を削らなくなったのは、青少年に刃物を売らない、刃物をもたせない運動だけが原因ではなさそうだと踏み込んでいきます。

「ある先生はこんな風に話してくれました。学校でナイフで鉛筆を削らせると、中には指にちょっとした傷をつくることだってあります。ところが今の父母の中には、そんなことでも居丈高になって学校へ乗り込んでくる、あるいは学校ではらちが明かないとみると教育委員会に問題をもっていく、そういうことが盛んなのです。私たち教師は本当は子どもたちにナイフを使うことなど色々と教えたいと思うのですが、こういう風潮の中ではつい二の足を踏んでしまうのです」

つまり、二村先生が教頭になったときに感じたこと、さっきの新聞の投書の話と同じなんですが、子どものことなのだから学校がやるべきだとなんでも学校に押しつける。その学校で子どもたちに何かあると、すぐ消費者意識的な発想でクレームをつけるので、先生たちも萎縮してしまっているというのですね。これが鉛筆削り器に頼っていった理由の骨格なんじゃないかと花森さんは言っているわけです。そしてこう記します。

「ぼくはもともとナイフで鉛筆を削ることや、箸をちゃんと持つことや、ヒモをきちんと結べるようにすることなどをしつけていくのは家庭の仕事だと思っています。今はそうはいきません。ちょっと手をのばせば、ガリガリと鉛筆を削る道具が、いっぱいでてきます。（中略）そうすることで、こどもが少しでも勉強ができると勘違いしている時代ですから、こういう時代に親が人間の手わざをいろいろ教えていくのには、そうとうな覚悟がいると思います。しかし、それは親がしなければならないとても大きな仕事です」

その一方で、教師側の意識も強く問います。

「先生たちのなかには、ごく単純に、これからの世の中では、ナイフをつかう仕事なんて、考えられませんからね、といった人が、なん人かいました」

つまり、先ほどのカッパ先生のように、ナイフを使わせることも大切な教育だと教える先生がいる一方、いまどきナイフで鉛筆を削ることに教育的意義などがあるのかと思う先生もいたわけです。花森さんは、再び家庭の責任を問います。

「ナイフは鉛筆を削るだけでなく、庖丁もナイフの一種です。いまのお母さんたちの庖丁使いの危なっかしい手つきを見ていると、私たちが戦後犯してきた一つの過ちに気がつきます」

これが書かれた 1978 年当時の小学生の親といえば、団塊の世代です。いま花森さんから料理のダメ出しをされた女性たちには、もうお孫さんがいます。この意味を深く考えたいところです。第二の脳と言われている子どもたちの手が音痴になっているということは、時代ごとに、いろんな人が、それぞれの立場で警鐘を鳴らしてきたわけですね。つまり少なくない数の人は気づいていた。小刀や包丁が使えない手。紐が結べない手。卵を割れない手。箸をちゃんと持てない手。紙の枚数が数えられない手。

今の世の中は手を圧殺しようとしているという事を書いた 1978 年のその年、花森さんは亡くなっています。この「人間の手について」という記事は、いわば遺言です。しかし彼の提言は、会染小学校のような取り組みを除いては反映されてこなかった。多くの人はそのことにおそらく気づいていながら。

私たちが、この『教育と刃物』で言おうとしていることは、新しくもなんでもありません。30 年以上前に気づき、一部では言われていたことを、もう一度拡声しているだけです。ただ、私たちなりにひとこと付け加えることがあるとすれば「これ以上、宿題を先送りするのはやめませんか」ということです。

今日はありがとうございました。